教育センター通信

火床（ほど）の火の心を紡ぐ

第９号（通算第２８号）
平成２７年１２月１８日
三条市小中一貫教育推進課
教育センター　発行

小学４年生と中学１年生がペアになって竹箸を作りました。その竹箸で豆をつかんで運ぶリレーをしました。５分間で豆を何個運べるか、７つのグループで競いました。

第三中学校区「小中合同小刀体験学習」（１１月２７日）

図書館教育も小中連携で

小中一貫教育推進課指導主事　大西　聡子

今年度の始めに、ある中学校の図書室に新着本として「鹿の王」（上橋菜穂子著）が入りました。この本は 2015 年本屋大賞第１位に選ばれ、その著者は 2014 年国際アンデルセン賞の作家賞を受賞しています。また、その代表作「守り人シリーズ」は、幅広い年代層に読まれています。そこで、図書館主任の A 先生は全校オリエンテーションにおいて「鹿の王」を紹介する際に、「『守り人シリーズ』を読んだことのある人はいますか？」と尋ねました。しかし、挙手した生徒は大変少なかったとのことです。

A 先生の質問の意図には、「守り人シリーズで物語の楽しさを知っていれば、鹿の王を喜んで読んでくれるだろう」という思いがありました。この結果に、A 先生は「当然読んでいてほしいと思う本を読んでいない生徒が多い」と大変残念そうでありました。

さて、去る 11 月 10 日に、三条市小・中学校図書館協議会図書館主任研修会が開催されました。今年度は、図書館教育に小中連携の視点を取り入れた研修会にしようと、小学校と中学校の先生方が子どもたちに読ませたい本や学校の蔵書等を紹介し合いました。研修会に参加された方の感想を次に紹介します。

「中学校区内の小学校（中学校）における図書館教育の取組や、他校での実践を知ることができました。」「小学校（中学校）との違い等を感じることができました。」「人気の本に共通点があることに驚きました。」

今年の研修会において、小中連携による図書館教育の第一歩を踏み出すことができました。

今後、小中連携による９年間の連続した読書指導が充実し、中学校区で共通した児童生徒に人気のある蔵書を備えることにより、本が好きな子どもたちや本を進んで読む子どもたちがさらに増えてほしいと思います。

合理的な配慮に基づく授業づくり研修会 ～11月19日～

「インクルーシブ教育システム構築モデル事業校」の授業・実践から、授業における合理的配慮のあり方を学ぶ標記研修会が開催されました。

①授業公開：嵐南小学校

小林勝文教諭、知野浩子教諭が「合理的配慮に基づく授業」の実際映像を使って発表しました。「指導のねらい」「児童の実態」を踏まえた合理的配慮の具体例をいくつも紹介しました。

②研究協議会

①についての授業者による授業考察や質疑を行った後、グループ協議を行い、その後、グループでの協議内容を発表しました。以下要約。

- 担当者間の事前事後の打合せ（障害の状況等）が不可欠である。
- 朝の会など一緒に過ごすことを大切にしていく。
- その子の得意なことを活動の中に生かしていく。賞賛を大切に。

③合理的配慮に基づく授業の実際：月岡小学校

堀越久美子教諭、佐藤　悦教諭が病弱・身体虚弱学級に在籍する児童への合理的配慮について、多くの映像をもとに発表しました。

【受講者の声】　※肯定的評価（役に立った、どちらかと言えば役に立った）：１００％

- 合理的配慮を計画的、意図的に取り組んでいく上で、実際の授業場面での話し合いがとても参考になった。全職員が個々の特性を理解した上で配慮についての提案や計画ができるようにしていきたい。
- 合理的な配慮がユニバーサルデザイン化し、交流学級の子どもたちも学びやすくなる実践例を学ぶことができ、とても有意義でした。学んだことを担当する子どもの指導に生かしていきたいと思う。
- 交流学級で過ごしやすくするというねらいのもとで、不足している力を高めるような色々な取組をされている発表が大変参考になりました。交流学級側としても真似したい所がたくさんありました。
- 通常学級での支援のあり方（全ての子にとってメリットのあるもの）について考えるよい機会になったし、個に応じた支援についてもっと学ぶべきだと感じた。

全国学力・学習状況調査を活用した授業改善研修（12月2日）

昨年度大好評だった標記研修会を、今年度は開催時期を１か月以上早めて実施しました。

ねらい　国立教育政策研究所の「授業アイディア例」を参考に、自分がこれまで行ってきた授業と、そこに示されている授業例を比較したり分析したりすることで自身の授業改善を図る。

対象者　小学５年生を担任している教員の希望者
中学２年生の国語・数学・理科を担当している教員の希望者　その他希望する教員

国語に２名、算数・数学に１０名、理科に３名、小中学校計１５名の、授業改善の意欲に燃えた教員が参加しました。「国語」「算数・数学Ａ」「算数・数学Ｂ」「理科」の４グループに分かれ、各自が決めてきた事例について自分の考えを整理し、作業シートに記入しました。

その後、各自の事例と考えを紹介し、授業改善のためのアイディアを出し合いました。各グループに小・中学校の教員がいたことで、授業の進め方の違い・指導上の困難さを共有し、小・中学校の指導のつながりを踏まえた授業の大切さを再確認していました。

【受講者の声】　※肯定的評価（役に立った、どちらかと言えば役に立った）：１００％

- アイディア集をもとに授業の案を練ることで現実的な研修になりました。個人としてはまとまらなかったアイディアも意見をいただくことで活かせる内容が見えてきました。
- 小中合同で行うことで小学校の学習が中学校にどう反映しているかが実感を伴って分かった。
- 算数Ｂ問題を検討することで単元の系統性、下学年で強調して指導すべきことを改めて気付かされた。
- 小学校の先生や中学校の理科の先生と色々な意見を聞いて大変刺激になりました。もっと理科の授業研究を頑張ろうという前向きな気持ちにさせていただきました。ありがとうございました。

アクティブ・ラーニングで汎用的な力を養う

教育センター指導主事　小池　和秀

言葉は、観察、報告、説明などの知的活動だけでなく、芸術表現や鑑賞、話し合いなど、コミュニケーションや感性・情緒の基盤です。学習指導要領のもとで「言語活動の充実」が謳われ、学習のスタイルも変わってきました。特に小学校を中心に、ペアやグループになって子どもたちが主体的に活動していく場面を参観することが増えています。一問一答式、一方的な知識伝達式、といった授業はほとんど見かけません。現行の小学校国語科学習指導要領では、「話し合う」などの意味での「～合う」という表現が２４箇所出てきますが、教室での相互性や協働性ということへの意識も非常に高まってきています。

ところで最近、アクティブ・ラーニングという言葉を目にすることが多くなりました。学習者の主体性、協働性、実践性を重視した取組で、課題発見、課題解決型の学習です。これ自体の大切さは改めて強調する必要はありません。

しかし、そうした学びが成立するためには、一定の基礎・基本が大事になります。そもそも思考力が関わる活動内容は複合的です。例えば、「事典を読んで調べ、その内容を自分なりに考えてまとめ直す」という活動をする場合、「課題意識をもつ、調べたり読んだりする、課題意識に対応して考えをまとめる、書く」という下位活動があり、それぞれに思考力が必要です。字を読めなくてはいけないし、学年によっては必要に応じて国語辞典などを利用することも出てきます。読んだことをメモに箇条書きで整理することも必要になります。文として適切に表記する力も必要です。

ところが、全国学力・学習状況調査を分析すると、文を短く書き換える問題のできがよくない。例えば、平成 21 年度小学校Ａ問題8（接続語を使って一文を二文に分けて書く設問）は正答率 14.7%。同じ問題の平成 25 年度小学校Ａ問題3（接続語を使って一文を二文に分けて書く設問）は正答率 23.6%。果たして主体的な学びを支えるだけの力はついているでしょうか。大切なことは、子供が実際に「できるようになる」という結果です。そのためには、だいたいの具体的目安を示すことも必要です。例えば小学４年生では、日常的なことに関する自分の意見を 400 字程度、段落を二つ以上分けて原稿用紙に書くことができる。例えば、「キーワード」という言葉を適切に使って説明文について討論ができる、というように。

また本時の評価も、例えば「振り返りの場面で、しっかりと話し合いができたか」といった抽象的な項目が指導案に記載されていることがあります。何を学んだのか、「しっかり」の中身は何なのか、もし達成できなかったとしたら原因は何か等、具体的に分析し、次に活かす必要があります。

これからの時代は、環境問題、エネルギー問題、少子高齢化の問題など解決の答えがすぐにでない問題が山積しています。また、子どもたちが大人になった時に、現在存在していない職業に就く可能性も高いと言われています。このような環境の中でよりよく生きていくためには、主体的に生きる力、人と協働して問題解決ができる力、思考力、想像力などの汎用的な力が重要になります。学習を通して、知識、生活経験、価値観、心情などを結びつけるネットワークを一人一人の頭の中につくることが必要です。そして、自分に入ってきた情報を、そのネットワークにつなげて思考し、意味づけ・価値づけして表現したり、自分の生活に役立てたり、自分の生き方や考え方に取り入れたりすることができるようにします。これが、最終的に育てたい汎用的な力となっていくと考えます。

（参考文献：平成 27 年８月 26 日　文部科学省中央教育審議会教育課程企画特別部会　論点整理）

「全国サミットｉｎ三条」参加者のアンケート結果から

前号では「第１０回小中一貫教育全国サミット in 三条の総括」を掲載しました。今号では総括を行う際の材料とした「参加者のアンケート結果」をお知らせします。

【第１日目についてのアンケート結果】

	４	３	２	１
Ｑ１　参加授業公開校区の取組内容は理解できましたか。	４２.５	５２.８	４.３	０.４
Ｑ２　指導案集は参考になる内容でしたか。	３５.２	５４.７	９.４	０.６
Ｑ３　公開授業は参考になりましたか。	３９.６	４５.８	１２.６	１.９
Ｑ４　授業では、９年間の系統的な学びの連続性・適時性を感じましたか。	２２.１	５６.７	１８.０	３.２
Ｑ５　児童生徒の学習意欲が向上するような授業でしたか。	２９.０	５５.１	１４.０	１.９
Ｑ６　協議会での参加授業公開校区の取組内容は参考になりましたか。	３４.４	５７.３	７.７	０.７
Ｑ７　協議会の指導者助言は参考になりましたか。	３８.１	５１.３	９.６	０.９

※　４：そう思う　３：大体そう思う　２：あまり思わない　１：思わない　数値は％

成果　Ｑ１、Ｑ２、Q6 で肯定的評価（４＋３）が高かった。これまでの取組が認められ、高評価を受けることができた。子どもの姿で語ることができ、参加者に評価されたサミットとなった。

課題　Q4 の評価が他の項目と比べ、低かった。１～２時間の公開授業で「９年間の系統的な学び」を伝えることは簡単ではなかった。今後も小中一貫カリキュラムの活用と改善を進める。

【第２日目についてのアンケート結果】

	４	３	２	１
Ｑ１　大会冊子（要項）は参考になる内容でしたか。	３５.２	５５.５	８.３	１.０
Ｑ２　開会行事の挨拶は参考になる内容でしたか。	２０.２	４０.７	３１.１	７.９
Ｑ３　基調講演は参考になる内容でしたか。	７０.６	２６.１	３.０	０.３
Ｑ４　プレゼンテーションは参考になる内容でしたか。	２８.１	５６.３	１２.３	３.３
Ｑ５　ポスターセッションは参考になる内容でしたか。	２６.２	６２.４	９.９	１.４
Ｑ６　シンポジウムは参考になる内容でしたか。	３８.８	５２.２	７.４	１.７
Ｑ７　義務教育学校の必要性を感じましたか。	２７.０	５４.０	１６.０	３.０
Ｑ８　サミットに参加してよかったですか。	４４.６	４６.２	６.９	２.３

成果　Q3、Q6、Q８で肯定的評価（４＋３）が高かった。小中一貫教育の歩みと展望、目指す授業の内容までを具体的に語られた基調講演、シンポジウムが高い評価を受け、総合評価をさらに高めた。

課題　Q2 が他の項目に比べ、低かった。運営面の打合せが不十分であった。

【自由記述より】

１　児童生徒の取組に関する記述

〇小学生と中学生が深く関わって授業する素晴らしさをみせてもらった。

〇それぞれの授業に中学校区の特色を生かした内容が良く表されていて、勉強になった。

△活動や作業を通して築かれた人間関係が、日常の人間関係にどう返っていくのか、お聞きしたかった。

２　教職員の実践に関する記述

〇小中一貫教育のメリットを生かすために小中教職員が時間をかけて連携している様子がよく分かった。

〇「無理せず、できることから、やれるところから」の言葉を大切に持ち帰りたい。

△中学校の学習を意識して、小学校で育てておきたい資質や力を明らかにした授業構成が必要だと感じた。

３　カリキュラムに関する記述

〇中学校区全体で子どもを育てていこうとする姿勢が伝わってきた。

〇小中教職員が一緒に指導案を作成し、導入も工夫され、子どもたちも学習への関心を高めていた。

△小中交流授業は良いと思うが、それを効果的に学力の向上・強化につなげるのは難しいと感じた。

４　その他

〇基調講演、シンポジウムを通して、小中一貫教育の新たな展開を具体的にイメージすることができた。

〇ポスターセッションでたくさん話が聞け、参考になった。所属校の実態を見直し、もう一度取り組みたい。

△小中一貫教育の推進のための独自の予算や人的余裕が必要である。予算と市教委のフォローが欲しい。